

9. 「バリアフリー」

本時のポイント

1. 高齢者や身体障害者が社会に参加し日常生活をおくるには、それには多くの障壁（バリア）があります。
2. その障壁を取り除くことをバリアフリー（Barrier Free）といいます。ここでは、パソコンやインターネットの利用におけるバリアフリーを考えます。

（1）バリアフリーの概念

■バリアフリー化推進；

<http://www8.cao.go.jp/souki/barrier-free/bf-index.html>

情報化社会はマルチメディアの活用のためにパソコンなどの情報機器の利用が基礎になります。ところが、高齢者や身体障害者にとって、現在の情報機器は使いにくいとか、電子メールやWebページが利用しにくいといった障壁があります。

高齢者や障害者も含むすべての人が様々な情報にアクセスできることをアクセシビリティ（Accessibility）といいます。すべての人に平等にアクセシビリティを保障するために、使いやすい製品やサービスを設計することをユニバーサルデザインといいます。すなわち、バリアフリーとは、アクセシビリティを向上させるためにユニバーサルデザインを考慮して、情報機器やWebページなどを作成することだといえます。

バリアフリー

高齢層

利用機会の提供
操作の容易化

身体障害者

肢体不自由者

音声入力ソフト

聴覚障害者

携帯電話での文字通信

視覚障害者

点字変換ソフト

文章読み上げソフト

ホームページ作成でのエチケット

情報機器の利用能力の有無は、社会生活のなかで大きな格差を生じる。「情報弱者」を作ってはいけない。特に、高齢や身体障害がその原因になってはならない。

バリアフリーは、健常者が障害者に対する思いやりだと考えるのは不適切です。思いやりも必要ですが、あくまでも障害者の基本的な権利であり、社会の義務であると認識することが必要なのです。

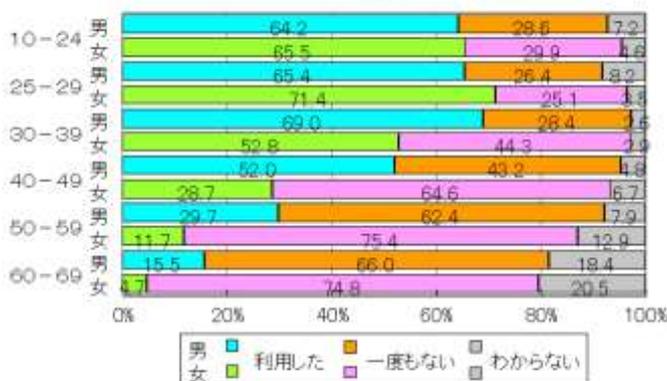
(2) 高齢者へのバリアフリー

一般に高齢者は新しい変化に取り残されがちですが、特にパソコンやインターネットなどは、今までの生活ではなじみが薄かったために、年齢による情報格差が生じています。最近では急速に解消されてきましたが、2000年時点では、50歳代では、今までインターネットを一度も利用していない人が10%近くいますし、半数近くがキーボードをほとんど使えない状況です。携帯電話の所有率も

低く、あまり利用したいとも思っていないようです。

しかしこれからは、少子化の影響もあり高齢者の社会進出が必要ですし、職業につかない人も交際を広げたり趣味や暮らしの情報を得るには、インターネットの利用が効果的です。ところが、高齢者がパソコンやインターネットの技術を習得し活用するには、目が疲れるとか記憶力が低下しているなどのハンディキャップがあります。そのために若い人とは異なる習得の機会が必要であり、ボランティアや有料の教室も盛んに開かれています。

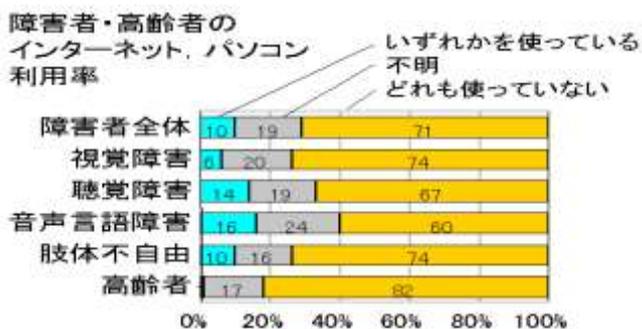
インターネットを利用した経験



(株)リサーチ・アンド・ディベロプメント、2000.9
 首都圏(600人)大阪圏(400人)
<http://www2.rnd.co.jp/eM/report/012wm200009/detailed/01.htm>
 より作成

(3) 障害者へのバリアフリー

障害者のパソコン・インターネットの利用は、健常者と比較してかなり低いことが統計的にも示されています。特に視覚障害者の利用が低くなっています。



郵政省「通信利用動向調査」1999
<http://www.npt.go.jp/policyreports/japanese/group/tsusin/90531x51.html> より作成

障害者がパソコンやインターネットを利用するには、目の不自由な人はディスプレイが見えませんし、手の不自由な人はキーボードやマウスの操作が困難です。このようなバリアを解消する必要があります。また、従来は耳が不自由な人は電話を利用できませんでしたが、携帯電話での電子メールにより活用できるようになるなど、積極的な面での情報機器の活用を考えることも重要です。

①情報技術による支援

障害者は、街に出向くことが困難であったり、長時間をとられたりしますので、電子メールや電子図書館などにより、自宅にいて情報を入手したり発信することができると便利です。また、携帯電話と道路標識や信号などと組み合わせることができれば、視覚障害者が街を歩くのが、今よりも容易になりましょう。

パソコンや周辺機器も情報技術の発展により、多くのバリアフリー支援ツールが出現してきました。そのうちの代表的なものを列挙します。

(a) 音声読み上げ機能

電子メールやWebページを音声で読み上げる機能です。これはかなり実用的になっています。

(b) 音声入力機能

キーボードやマウスの操作をする代わりに、音声で入力する機能です。視覚障害者だけでなく、肢体障害者の支援になります。

(c) フォントの切り替え機能

視力の弱い人や高齢者にとって、ディスプレイに表示されディスプレイ的に小さ過ぎます。通常のパソコンでも文字を拡大する機能はありますが操作が複雑です。その解決のために、大きなアイコンをクリックするとかハード的なキーを押せばよいという機能も出てきました。

■バリアフリー化推進 要綱要旨

～ 誰もが社会の担い
手として役割を持つ国
づくりを目指して ～;

<http://www8.cao.go.jp/souki/barrier-free/youkou/yousi.html>

(d) 点字機能

点字キーボードだけでなく、点字で出力する特殊なディスプレイも存在します。また、通常のディスプレイのアイコンやボタン上にカーソルを合わせると振動する「触覚マウス」もあります。

②ネチケット

上記のような情報技術による支援や、それらのハード・ソフト購入の費用面での支援も必要ですが、それにもまして、Webページを作るときに、高齢者や障害者を考慮した工夫をすることが重要です。

本時の重要事項

1. 情報化社会はマルチメディアの活用のためにパソコンなどの情報機器の利用が基礎になります。ところが、高齢者や身体障害者にとって、現在の情報機器は使いにくいとか、電子メールやWebページが利用しにくいといった障壁があります。
2. すべての人に平等にアクセシビリティを保障するために、使いやすい製品やサービスを設計することをユニバーサルデザインといいます。